

(葵無言にて時忠を見つむ。時忠斷然立ち去らんとす。葵突如又身を廊に投じて泣き出す。時忠振り返り走り戻りて之れも亦顔を、そ向けてなく。月光水の如く。風の音颯々として起る。靜に幕閉まる)

(おこころはり)

歴史上の事實との錯誤が往々あります。衣裳の知識は多く他より借りました。

大正七年七月、洛北一乗寺村 永嶋氏親戚宅にて起案

鶴丸の思ひ出

佐々木 高遠

もうあれから數年になる。

ある年の春の大掃除のことであつた。座敷から中の間や通常事務所と呼んでゐた八疊の間や次の間にかけてすらりと襖を取りはづしたものだから表側の方はまるで大廣間の様になつてゐた。高机や幅の廣い座り机や硝子戸のついた大きな本棚なども他の室に運び出されて、空虚な伍藍堂の様になつた室は、やがて疊が剝がれ、塵埃だらけになつた床板が除けられて、縦横に走つた根太が骸骨の様に現れた。床下は屈んで歩ける位の高さだつた。年上の伯母と其の日傭はれてゐた鶴丸が床下を掃く爲に草箒を持つて入り、まだ五十足らずで二つ三つ伯母より年下ではあつたが大叔父の未亡人であるおみね小母と、其の頃裏の離家を借つて獨り住んで居られた婦人傳道師の白井さんとの二人は、庭に下りて疊の埃をばた／＼はたいてゐた。床下からと

(をばり)

疊から出る黄ろい白つばい埃が明るい陽光に渦巻いて纏れては空に舞ひ上つた。

「大變な埃ですね」と若い白井さんは叩くのを止めて眉を顰めて云つた。

「わゝ、何時迄でん限りがございまつせんあ」と云ひ乍ら、おみね小母は尙はたき續けた。埃を吸ふ位何とどでも思はない様な平氣な無頓着な態度で。

やがて伯母が粗い木綿の仕事着も頭に被つた手拭も埃に塗れて上つて来て、ベツと唾を吐いて

「ごみだらけになつて」と微笑み乍ら呟いて、肩や袖口など拂つた。

「も少しで腰骨の折るゝ所ごわしたぞ」と、最後に全じく筒袖姿の鶴丸が、年は四十五位だが馬鹿に老けて見ゆる深皺の疊んだ猿の様な顔を眞赤にして出て來た。

「はゝ……、あんたの鼻のてつべんにや煤がついとるばん」

「どら……、餘り綺麗な鼻ぢやつで煤まで慕うて來つぞ」

其の言葉に覺えず四人共愉快な笑聲を上げた。それから今一息と云ふので床板を敷いて疊を運び始めた。其の時、

「やもめばつかりの掃除ごわすなあ」と鶴丸がふと氣付いた様にさう云つて笑つた。伯母等も「さうなう」と今更の様に互に見合つて笑つた。白井さんは卅餘りだが夫に死に別れ程なく幼兒をも失つてから傳道を志して遙々來て居られたのであつた。母と女中は手分けして外で働いてゐた。

鶴丸が腹痛を訴へ出したのは其日の夕方からである。掃いてゐた箒の手を突然止めて左の手でじつと腹部を抑へて眼を閉づるかと思ふと屈んでしまつた。其の皮膚のたるんだ皺の多い顔の眼の縁に一層小皺を寄

せ乍ら唇を食ひしはつてる様子や全身の微かな痙攣など只ならぬ風なので他の者も驚いて按排を問ふと、彼は惱ましきうに辛うじて細くその力の無さうな眼を開いてかう訴へた。

「どうかどこになり寝せて下はれ」

中の玄関の入口に當る四疊半のいはゆる次の間に蒲團を敷いて寝せて貰つた鶴丸は、蝦夷の様に曲つて寝乍ら、夫れから二日二晩と云ふものは引きよりにうん／＼呻いてゐた。

鶴丸が二三日姿を見せない様だと思つてゐたら、

「奥さん、ひどう腹がせきましてなあ、もう死にやせんかと思つたら、今日はどうやら癒つたで、出て來ました」と急に元氣の衰へた様な風でやつて來たのは、二十日許り以前のとであつた。數日前臺所に残つてゐた玉葱や馬鈴薯などを分けて貰つて大喜びで歸つたが、其の折己が家の側に落ちてゐた具殼に脂めいた物が入つてゐたので、夫れをバター代りにして揚げたのだと云ふ。宅では喫驚して

「そんな亂暴なをしたらほんとに死ぬよ。屹度何かの膏藥でも拾つたんだらう」

「わゝ、何か知いもはんが、ひどか目に會ひました」と大分參つたらしい様子だつた。

恐らく今度のは其の再發であるらしい。此の前のは到頭醫者にも診せないで——診せようとしても出來なかつたであらうが——濟んだと見わるが、宅では驚いて早速其の晩掛り附けの醫者に電話をかけること、金縁眼鏡をかけた色の白い代診がやつて來た。母から一應容態を聞いてから、蒲團にくるまつてたゞもううん／＼唸つてゐる鶴丸に、

「どんな具合ですか」

「堪らぬごつせいで」と彼は呻く様に答へる丈だつた。代診がやをら膝を近寄せて蒲團を半ば剥いで診てやらうとしても、彼は腹を抑へた手を放さないので、後には代診も

「手を放されぬので診られませんから藥丈上げるとにませう」と、家人に辯解する様にさう云つて歸つて行つた。

鶴丸はいつも汚い垢じみた木綿物を着てゐる貧乏な野菜賣りだつた。元私の家の知邊だつた或軍人の別當だつたのが主人に死なれたのださうだ。よく面白いと云ふ愛嬌者だつたと共に素敵な變物で、夏など少し萎びた野菜は捨て、了つて決して賣らうとしなかつた。私の家の前の溝にも一度捨て、あつたのを記憶してゐる。「そんなことをしたら損するぢやないか」と云はれると、いつも「悪い物を賣ると罰が當りますぞ」と平然として答へるのであつた。そして折々資本迄食つて了つては、「奥さん、金を少し下され」と端金の無心に來るのであつた。そして若干の金を貰つては御禮云つた後で例のぶつきらばうな調子でかう云ふのである。

「奥さん、與るのは貰ふより仕合せですぞ。私でも持つてさへ居るなら人に與りますぞ」

或時貸家の方の修繕の手傳ひに備つたのがあつた。其の折母が様子見に行くと、皆で垣を結つたり井戸側に漆喰したりしてゐたが、鶴丸が此方を向いて御辭儀すると腰を屈めた拍子に、其の脹らんだ懷から覺わすじやら／＼と落ちたものがあつた。井戸の釣瓶のもう不用になつてゐた古鎖を物置からでも探し出して來たものらしい。鶴丸は多少狼狽し乍らも平氣な風で復た懷の中に扭ぢ込んだ。

秋も過ぎて時雨が降つたり折々淡雪が姿を現したりする頃のとだ。裏畑の大根が一二本盗まれて居る様だと女中が云つてゐた翌々日、例の通り野菜賣りに來た鶴丸が裏に廻るので不審がつて、女中がそつと物陰から見て居ると、御本人つか／＼と大根畑に近づいて周圍を憚る様な模様もなく大きな真白いのを引抜いで押し戴いて、「これも神様の御恵み」と呟き乍ら引返して來るのであつた。女中も之には開いた口が閉からず其の儘家に入つて家人に告げた私等は夕食の時之を聞いて大笑ひしたのであつた。母が後鶴丸に「貰ひたければ一度許しを得てからにして下さい」と云ふと、其の大きな眼をばちつかせ乍ら頷いて、「はい」と一言答へてすましてゐた。他人の餘つてゐる物を利用して善用してやつてゐる様な氣だつたかも知れない。勿論其の大根は賣る爲ではなくて自分で食べるつもりだつたらうと思ふ。

書き落した鶴丸は古くからのクリスチャンで「私が九州では最初の新教信者ですぞ。私が洗禮を受けたのはな、明治十三年でホブキン(假名)と云ふ西洋人が始めて渡つて來た時ごわした」と云ふのが其の自漫だつた。彼が眞にどの位信仰を持つてゐたかは疑問だが或は普通人以上だつたかも知れぬ。耳が遠くて他人の祈禱など聞けぬけれども聯合祈禱會などに出るとがあつて、或時など或牧師の祈禱最中も御構ひなしに祈り出して、到頭牧師は途中で止めて了はねばならなかつた。彼は例の口に物を含んだ様な聲で「天に在す神様、どうぞすべてのものに御恵を與へて下さい……」など滔々と節を附けて祈つた。然し言葉は不分明で、文句の終りになると結びを附けないで直ぐ他の事に移つて行くのであつた、彼の頭には明に病的な欠陥があつた。彼の言葉から推測すれば若い折の悪い病の影響であつたかも知れぬ。

「今日はなあ、監獄に行つて、只で入れて貰へまいか頼んでみましたがあ、悪いとした者しか入れられ

ないちうて斷られて了ひました」と悄然として家に寄つて話して行つたともあつた。以前は妻が居たさうだが夫れにも逃げられて今は誰一人頼る者のない獨り身であつた。其の身の上話に依ると、若い時分放蕩して養家を出たのださうで、相當の者になつてなければ歸郷する譯には行かぬと云つてゐた。鹿兒島縣の生れで、その住んでゐた××町の横町には他に全様貧乏で風違ひな二人の全郷人があつて、町内では「鹿兒島三奇人」と呼んでゐると云ふ噂であつた。

「奥さん、今度は大病ごわすぞ」と脊を擦つてくれてゐる母に鶴丸は呻吟し乍ら切れ／＼に云ふのであつた。「なあに心配しなくつても藥を飲んで二三日寝てゐれば屹度癒るからね……」と母は慰めた。

母や伯母等や白井さんなど代る／＼擦つてやつてゐた。母が止めて去ると「お離れの先生」と叫ぶので人の好い白井さんは微笑し乍ら「はい／＼」と應へて擦つてやりに來られるのであつた。私は其の頃中學の三年位だつたかと思ふ。忌はしい呻き聲と其の仰山さを憎らしく思つて、「畜生靜にしろ、あんまり甘わるな」など呟いたものだ。私は其の折苦痛を仰山に訴へてゐるとしか思つてゐなかつたのである。

翌日も例の代診が呼ばれてやつて來た。其の絹織物が鶴丸の垢じみた着物に觸れはしないかを恐れる様な態度ではあつたが、代診が彼を診察しようとしても、彼は悶へる丈で相變らず診せなかつた。

三日目の朝鶴丸は濟生會から世話を受くるとになつて市役所の擔荷で市病院に送られた。附添には私の母が行つた。病院に入ると多くの白服の看護婦と小使がぞろ／＼出て來て、新に施療を受けに來た患者に輕蔑と幾分好奇心の交つた眼を投げて例の通り饒舌し乍ら特別の病室に伴つた。院長が急いで入つて來た時、擔荷

の儘寢臺の上を下ろされてゐた鶴丸は、やつと少し眼を開いて、ふと思ひ出したのか、

「昨日の晩から小便に行きません」

と唯一語呟く様に云つて永久に眼を閉ぢた。其の周圍に面白半分見物に集つてゐた看護婦等は、此の見穢らしい男の寢言の様な呟きを聞いて、覺わずごとと笑つた。院長は之を制し乍ら、息の絶わた彼に馬乗りに跨つて數回人工呼吸を施したがもう効驗がなかつた。院長は側に昂奮して立つてゐる附添の私の母に、どう云ふ關係の者であるかを半ば怪しむ様な様子をし乍ら、告げた。

「残念ですが、もう駄目らしいでございます」

鶴丸の死を傳へられた時は、少なからず驚いたが、夫れと共に、彼の病氣や呻吟を冷笑つてゐた私は、今更同情の足りなかつたことを後悔し貧困だつた彼に憐憫の情を禁じ得なかつた。彼の病氣は今では腸の捻轉だつたらうかとも思ふが、其の急死の原因は尿詰りだと云ふとだつた。私等は代診の不注意に對して幾分不平を抱かずに居れなかつた。

やがて鶴丸は同地で骨にされて、出奔以來何十年ぶりに郷里鹿兒島の地に歸つて葬られたのであつた。

鹿兒島三奇人の一人に私の家で通常「かこしま」と呼んでゐる同様の野菜賣りがゐる。鶴丸の後を引受けてゐて折々は押賣りしに迄來るが、櫻島大根の様に圓々と肥わた大軀の、ぎよろ／＼とした大きい眼をしてゐる一見恐しい身かけにも似合はず、極友情の厚い男で自ら骨箱を持つて郷里に行つた。其の後私の家に來て語るには、

「人間と云ふ者は薄情な者ごわすなあ。鶴丸の従兄弟が居ると云ふ話を聞いてゐましたで、死んだ通知を出した所が、もう何十年も行方不明だつたで今更此方に持ち込まれても困るちう返事でごわした。夫れから煎餅蒲團やら何やら屑許じやつたが、あれの持物を皆賣拂ひましたら七圓許りになつたんでさう報せてやつたら、やつと承知した様な譯ごわしたと。葬式は四圓あつたらどうやら足るんで三圓残るからとでも思つたのじやろ。私など貧乏はするが、そげな心は持ちません。二三日稼業迄休んで我が錢出して鹿兒島迄行きましたからなあ」

鶴丸が死んで一年目の春であつた。私の家では彼の噂も殆ど消ぬかゝつてゐたが、或日かごしまが投げ出す様にかう云ふのであつた。

「鶴丸は死んでしもて、ほんとに仕合せじやつたぞ」

「そんなとはなかばい。あんたは嫁さんもありや子寶もあるし、どれ丈よかか分らん」と家人が云ふと、「然し、此の頃の様に物が高うしちやなあ」と、聲を落すのであつた。まだ世の中を知らぬ私は夫れを聞いて彼等を、云はゞ社會の下敷になつて呻いてゐる様な彼等を、一体どう思つたらいいのか皆目分らなかつた。私は、氣の毒の様な又夫れが當り前である様な變な氣持で、其の逞しい巨軀を包んだ筒袖姿の野菜賣りをじつと見詰めてゐた。

今年もまたあれから何年目かの春が廻つて來た。當時に比ぶれば私の家にも色々な變化があつた。おみね

小母は既に數年來臺灣に居る娘の嫁入先に行つて居るし、婦人傳道師の白井さんは、風聞によれば先頃騷動のあつた朝鮮の京城教會に盡して居られると云ふことだ。其他の人に付ては茲には省くとして最後に私の母も最近所謂やもめの仲間入りをすることゝなつた。大掃除はいつも父の不在を見計つてやつたものだが、遠い彼の世に行つてしまつた今年は、全じ不在には違ひないが、さぞ淋しいものだつたらうと思はれる。私は愚直な愛嬌者の鶴丸が出入してゐた頃のことをそゝろに想ひ起さずに居られないと同時に、社會のどん底に蠢動しつゝも云はゞ嬰兒の様に天真であり生一本であつた彼に一種の同情と愛着をさへ覺ゆる。殊に彼が曾て其のぎよろ／＼した眼と貧に刻まれた深い皺を湛へて居る顔に、淋しい笑みを漂はせ乍ら、

「坊ちゃん、鶴丸—金—吉と云ふ名はどうしても私にやよ過ぎましたなあ」と欠談半分に云つた折のあの特異な表情を忘れるとが出来ないのである。

—大正八年五月一日—